

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	小池 由香里
2. 審査委員	主 査：（兵庫教育大学教授）岡村章司 副主査：（岐阜大学教授）平澤紀子 委 員：（兵庫教育大学教授）宇野宏幸 委 員：（兵庫教育大学教授）井澤信三 委 員：（兵庫教育大学教授）川上泰彦
3. 論文題目	保育を基盤とした個別の支援を促す支援体制の構築—保育者のアセスメントを踏まえて—
4. 審査結果の要旨	<p>学校教育実践学専攻学校教育臨床連合講座 小池由香里から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：令和8年2月19日（木） 15時0分～16時30分 場 所：オンラインでの実施</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>第1章 序章</p> <p>第1節 保育現場の実情</p> <p>第2節 保育の力と個別の支援</p> <p>第3節 個別の支援と応用行動分析学について</p> <p>第4節 本研究の目的</p> <p>第5節 本研究の構成</p> <p>第2章 就学前施設のスタッフに対するトレーニング・研修【研究1】</p> <p>第3章 単回の研修による保育者のアセスメント【研究2】</p> <p>第4章 保育所における個別の支援を支える環境の構築—支援体制づくり—</p> <p>第1節 適切な既存の保育の振り返りを促す園内支援体制の構築—個別の支援の充実を目指した介入の効果検討—【研究3-1】</p> <p>第2節 動画コンテンツを用いた保育者研修の効果の検討—実際の保育場面を題材にして—【研究3-2】</p> <p>第3節 保育所におけるケース会議のためのファシリテーション研修—ファシリテーターとしての実践の振り返りが及ぼす効果—【研究3-3】</p> <p>第5章 支援体制の定着・維持をもたらす要因についての検討【研究4】</p> <p>第6章 総合考察</p> <p>第1節 本研究で明らかとなったこと</p> <p>第2節 保育実践を基盤とした支援体制の構築と第1層支援としての位置づけ</p> <p>第3節 支援体制における保育者の個別の支援に関する技術・知識の向上</p> <p>第4節 施設内におけるコーディネーターの機能と実践</p> <p>第5節 限界と今後の課題</p>

本論文は、保育所において日常の保育実践を基盤としながら子どもの個別の支援を検討・共有できる施設内支援体制を構築し、その過程と効果を検討することを目的とした。

第1章では、保育現場における個別の支援の実態と課題を整理した。保育実践の中には個別の支援が内在しているものの、保育者自身がそれを明確に意識化できず、不安や困難感を抱えていること、また施設内で支援を継続的に検討・共有する仕組みが十分ではないことを指摘し、本研究の課題設定を行った。

第2章では、国内外の保育者研修に関する文献研究を行い、既存研修の特徴と限界を検討した。その結果、多くの研修が特定理論やプログラムに基づくスキル習得型であり、保育者の既有力量を基盤とした継続的実践への定着支援が十分でないこと、技術の維持・般化には日常的な振り返りとフィードバックを可能にする施設内体制が不可欠であることを示した。

第3章では、応用行動分析の視点を取り入れた単回研修を実施し、その効果を検証した。事前・事後評価を通して、保育者の個別の支援に関する技術・知識の向上を確認した一方、子どもの個別性に応じた対応には課題が残ることを明らかにした。副次的な効果として、施設内における情報共有や保育者間のコミュニケーションの活性化が確認されたことから、成果や課題を共有し、支援を共通理解として蓄積していく体制づくりが個別の支援力向上へとつながると考えられた。

第4章では、第3章の成果と課題を踏まえ、段階的研修を通じた支援体制の構築を試みた。研究3-1では、演習とセルフチェックを取り入れた研修を実施し、技術・知識の向上と保育者間の共通理解の促進を検証した。研究3-2では、向上が見られなかったセルフチェックの特定項目に焦点を当てたオンデマンド動画研修を実施し、支援体制内での補完的学習機会の有効性を検討した。研究3-3では、ケース会議の活性化を目的として副所長・副園長を対象にファシリテーション研修を実施し、自己評価の向上および会議における発言数の増加を確認した。

第5章では、これまでに構築した支援体制の維持・定着効果を検証する縦断的検討を行った。その結果、全体介入終了後も保育者の技術・知識は研究開始前より高水準で維持され、ケース会議も安定的に実施されていた。外部専門家による継続的介入に依存せず、施設内コーディネーターを中心とした学習循環が機能することが示された。

第6章では、総合考察として、構築された支援体制を多層支援システム(MTSS)の第1層支援の構造を用いて理論的に整理した。その結果、本論文の支援体制は第1層支援と共通する機能を有し、保育者の個別の支援に関する力量向上を支える基盤として位置づけられることを示した。

以上より、本論文は、保育者の内在的な「保育の力」を可視化・共有化することで、就学前施設における持続可能な組織的支援体制を実証的に構築した研究である。

2. 審査経過

小池氏の論文概要についての口頭発表が行われ、各審査委員からの論文内容に関する質疑応答を経て、審査委員会による審査が行われた。

(1) 研究目的と論文構成の整合性について

第1章、第2章では現場及び先行研究の課題の整理を通して、施設内支援体制に焦点を当てる必然性を理論的に位置づけ、第3章では単回研修の効果検証を通して保育者の力量と課題を精査し、第4章では段階的研修・オンデマンド研修・ファシリテーション研修を組み合わせる体制構築を試みている。第5章では介入終了後の維持・定着を検討しており、第6章ではMTSS第1層支援の枠組みで理論的整理を行っている。本研究は、「保育実践を基盤とした施設内支援体制の構築とその効果の検証」という研究目的に対して、論文全体が段階的かつ論理的に構成されており、目的と構成との整合性は概ね高いと評価できる。

(2) 研究の独創性と発展性について

本論文の最大の独創性は、外部から専門的技法を導入するモデルではなく、保育者が日常実践の中ですでに有している「保育の力」に着目し、それを意識化・共有化することで支援体制を構築した点にある。従来の研修は、特定プログラムや理論の習得を目的とするトップダウン型が主流であったのに対し、本論文は保育実践の振り返りを基盤とする段階的研修を行い、施設内コーディネーターを中核とした保育士間の協働モデルを提示した。さらに、この体制を多層支援システムの第1層支援の構造で理論的に位置づけた点も、実践研究と理論枠組みを接続した点で高く評価できる。

本論文は第1層支援の構築と維持までを実証したが、今後は行動問題等を対象とした第2層・第3層支援への拡張、支援体制の変容に関する適切で多様な評価、異なる自治体・組織構造への適用といった発展可能性を有する。特に、保育を基盤とした多層支援システムモデルの就学前版の構築へと発展し得る点は大きな意義を持つ。

(3) 学校教育・保育実践への貢献について

実践的貢献としては、個別の教育支援計画、ケース会議およびファシリテーション研修の導入、オンデマンド研修など実装可能性の高い手法の検証、コーディネーター（副所長・副園長）の役割の明確化により、施設内に学習循環を生み出す仕組みを実証的に提示した。この点は、現場に直接応用可能な知見である。特に、外部専門家が常駐しなくても維持可能な支援体制の具体的な知見は、人的資源が限られた現場にとって重要な示唆を与える。

本論文は、子どもの個別ニーズへの早期対応、予防的支援の強化に資するとともに、保育者の不安・困難感の軽減にもつながり、インクルーシブ保育の質向上に寄与する。結果として特別支援教育との接続強化、地域全体の支援力向上に貢献する可能性を持つ。保育士の技術への依存から組織的支援体制への転換を実証的に示した点で、制度的にも社会的にも意義が大きい。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は小池由香里の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。